いうまでもなく現実が適合の感覚として与えられているとき、人間には自己と対象の区別も感じられるはずはない。

だがこの幸福な適合の感覚は、その始まりからつねに一つの危機に脅かされている。人間の行動には失敗がつきものであり、行動の滑らかな流れはしばしば蹉跌の憂き目を見るからである。果実をめざして握った棒が意外に短すぎたり、鳥を狙って拾った石ころが投げるのに重すぎるかもしれない。いずれにせよ思いがけず多様な新しい状況に直面して、人は身についた行動の型が無効であることに気づく。

このように世界にたいする不適合の感覚のなかで、現代人も、そしてたぶん先史人も世界と自己のうちに分節構造を発見する。[1]手に取りながら使いようもない木の棒や石ころは手のひらに残り、堅さと重さと嵩ばりを含んで存在感を示し始める。それは行動の純粋持続からはみ出すとともに、世界の空間的な連続からも離脱してそれ自体の存在を主張する。

先史人にいわゆる五感の区別があったかどうかはわからないが、少なくとも働くことと感じることの区別がこのとき始まったはずである。対象と一体化してただ動き続けるのではなく、立ちどまって対象に向かい合うこと、世界に没入するのではなく展望することが発見されたと考えられる。だがそれはけっして人類の幸福な進歩などではなく、むしろ最初の苦渋の体験だったにちがいないのである。

その不安のなかであらためて見回してみると、世界はあらゆる種類の異物に満たされ、人はうまく適合できない環境に包まれていることにも気づく。第一に展望ということを知ってしまった目で見直すと、世界は人間の行動の及ばない茫漠たる広がりを示し、遠くへ進もうとすると、あらゆる未知の状況が待ち受けていることを予感させる。慣習的な行動の型の閉じられた円環の外には、いっさいの秩序を欠いた混沌の世界が浮かびあがったはずなのである。

私たちの幼児体験を思いだせば気づくことだが、意識誕生のまだ[ア]ハクメイの時期に、ときに人間には一種の物神崇拝（フェティシズム）の感情が芽生える。玩具や人形といった愛玩のために造られた道具だけではなく、おとなには思いがけない身辺の個物に幼児は特別の[イ]シュウチャクを示すことが多い。著名なアメリカの漫画『ピーナッツ』にライナスという子供が登場するが、この子は歩けるような歳になっても[A]一枚の古毛布を手から放さない。そして示唆深いのは彼がこの毛布を心の頼りにしていて、自分の「セキュリティー（お守り）」と呼んでいることである。まだ宗教心の芽生えていない幼児にとって、それはまだ呪術的に意味づけられた護符（チャーム）であるはずはない。だがこの段階で彼がすでに古毛布という一つの個物そのものを聖別して、それに心の救いを求めているということは多くを暗示するのである。

ライナスとは違ったかたちで、多くの子供たちはそれぞれ自分だけの「宝もの」を持っていて、玩具箱の片隅に人知れず隠していたりする。石ころやガラス玉や、[ウ]カイガラや虫の死骸など、それは必ずしも役に立つものでもなく、おとなが見て美しいものでもない。じっさい子供たちはそれを目につく場所に飾ろうとするわけではなく、繰り返し取り出して眺めているわけでもない。彼らにとって重要なのはそれが「ある」ということであり、つねに「ある」ことを思いださせるということである。むしろ「宝もの」の本質は隠されていることであって、盗まれも壊されもせずに、世界のどこかで同一性を保っていることだといえるかもしれない。

一つの確実な個物があって、それが自分とひそかに結ばれているという感覚は、たぶんまた自分そのものの同一性についての最初の自覚に道を開くだろう。今日も明日も、片ときの中断もなく「あれがある」という思いは、それを思いだす自分自身の変わらなさの保証となるからである。ライナスが古毛布に「お守り」の安心を感じるというのは、その古毛布の存続とともに彼自身の存続が感じられるということにほかならない。そしてその個物の存在感は、必ずしもそれが現に手に触れているかどうかとは関係がない。多くの子供たちが彼らの秘められた「宝もの」を思いだすとき、彼らは母親の懐を離れた茫漠たる世界のなかで、心理的に一つの確実な浮標に結ばれているのである。

すでに世界を合理的に見渡せるようになったおとなにとっても、この不合理なフェティシズムの名残りは随所に残っている。子供時代の玩具、着られなくなった古い衣装、「おじいさんの古時計」や変色した思いでの写真など、納屋の奥に収めたままなぜか捨てられないがらくたが誰にでもある。おとなにとってそれらはもはや積極的な「お守り」ではないが、捨てようとすると[エ]カスかに胸が痛むという意味で、ふしぎな存在の呼び声を秘めている。とりとめなく過ぎてゆく時間のなかで、それは個人の失われた過去を思いださせ、自己の同一性の不安を呼び覚ますとともに、その不安にたいする慰めとなる。懐かしさ

という感情がただの親しみではなく、どこか切実な痛みを伴っているのはそのためなのである。

こうした個物の持つふしぎな存在感は、たぶんヴァルター・ベンヤミンの言う「礼拝的価値」[B]にあたるものであろう。ベンヤミンは造形作品の価値を二つに分けて、形が通常の目に訴える「展示的価値」と、存在そのものが直接に心に伝える「礼拝的価値」を対立させた。たとえばある種の聖母像は日ごろは深く覆いに秘められていて、信者はただ見えない像のまえに額づくばかりである。そういえば日本の仏教にも秘仏として崇められる像があるが、この習慣はどうやら普遍的なものであるらしい。ベンヤミンはこうした秘められた尊像のありかたに注目して、近代以前には[2]それが通常の「展示的価値」と並ぶものであったと考える。振り返れば本質的にはじつはどんな造形作品のなかにも、二つの価値がつねに並立しているはずなのである。

「礼拝的」という言葉が示唆的なのは、それが第一に存在を心に思うことを意味しており、第二には人が何らかの安心を得ることを含蓄している点である。それはライナスの古毛布や子供たちの「宝もの」や、おとなたちの思いでの品の持つ二つの側面をうまく表している。今後は私たちもこの言葉を使うことにしたいが、そのさい一つだけ留保しておかなければならない点がある。ベンヤミンは実例を聖母像に求めて、対象を礼拝的にするものは宗教だと考えているが、これは十分に論証されていないからである。私たちがライナスを含む子供の例について観察したように、個物を礼拝的にしているのは、神と教義を持つ完成した宗教ではなさそうである。むしろ逆に、人間にはまず個物と礼拝的に結ばれたいという衝動があって、この礼拝的態度がのちに宗教へと成長したと見るべきではないだろうか。

このように考察を広げてみると、[C]先史人が行動の蹉跌のなかで最初の展望の姿勢をとったとき、まず浮かんだものが明確な形ではなかったことはほぼまちがいない。行動の流れからはみだした石ころや木の棒は、さしあたり何か重いもの、場所をとるもの、思いを寄せることのできるものとして意識された。意識は対象の輪郭を克明になぞるのではなく、いわば直接にその中核に届いていたといってもよい。やがてそうした個物が数を増やし、身辺に氾濫するようになると、不安を覚えた先史人はふとした偶然から、そのなかの一つを選んで手もとに置いたかもしれない。あるいはそれを他と区別するために、自分だけが

知る場所に隠したかもしれない。こうして彼が一つの個物と密約を結んだとたん、それをいわば価値の中心として、彼の世界は最初の秩序の気配を見せ始めたにちがいないのである。

（山崎正和「装飾とデザイン」）

問1 傍線部ア～エのカタカナの部分を漢字に改めよ。

問2 傍線部1「手に取りながら使いようもない木の棒や石ころ」とあるが、このように感じるようになった道具のことを端的に表現した二字の熟語を本文中から抜き出せ。

問3 傍線部2「それ」の指示内容を抜き出せ。

問4 傍線部A「一枚の古毛布」とあるが、ライナスにとって「古毛布」はどのような意味があるのか。

問5 傍線部B「礼拝的価値」とあるが、これについて以下の問いに答えよ。

1 ベンヤミンのいう「礼拝的価値」とはどのような「価値」か。「展示的価値」との関係に触れつつ説明せよ。

2 「礼拝的」という言葉についての筆者の見解を記せ。

問6 傍線部C「先史人が行動の蹉跌のなかで最初の展望の姿勢をとる」とはどういうことか。説明せよ。